Shakespeare の英語における 3 人称単数現在形語尾について
—*Romeo and Juliet* の場合—

田辺　春美

1　序論

William Shakespeare の作品は、1590 年代から 1611 年という初期近代英語期の中程、ちょうど世紀の変わり目を挟んだ時期に執筆され、まとまった分量の作品群を形成しているため、文学的な関心からだけではなく、初期近代英語の代表として英語史研究の対象となってきた。従って、今までに Shakespeare の作品にみられる英語の変遷を追求する研究は数多く行われてきたが、近年はコーパス英語学の発展とともに、電子化されたすべてのテキストの中から検索したい文字列を選び出すことが簡単にできるようになったことに加えて、社会言語学や語用論の発達により、従来伝統的に行われてきた研究に新たな視点から研究が行われるようになった。

このような英語史的観点からの研究テーマの一つとして、動詞の直接法 3 人称単数現在形語尾の変化がある。3 人称単数現在形語尾は、中英語では方言により、北部では -es、南部では -eth が使われていたが、15 世紀以降北部方言の -(e)s 語尾が使用される地域が徐々に南下し、一般動詞においては 17 世紀後半に -(e)s 語尾に統一された。Have および do は一般動詞とは異なり、中英語北部方言に由来する 3 人称単数現在形の hath, doth が遅くまで残存した。-(e)s 語尾と入れ替わった時期は 17 世紀初頭であったが、hath, doth は 18 世紀半ばまで見られた（Jespersen 1942: 20; 荒木・宇賀治 1984: 197-201; Nevalainen 2006: 90）。

本論文では、Shakespeare の作品にみられる 3 人称単数現在形の 2 つの異形の分布に関するいくつかの先行研究を概観し、作品の例として *Romeo and Juliet* を取り上げて、伝統的な語形である -(e)th と - 新しい -(e)s 語尾の入れ替わりについて考察する。

2　先行研究

2．1　初期近代英語期の 3 人称単数現在形語尾の分布

16 世紀から 17 世紀にかけて、動詞の 3 人称単数現在形語尾が -(e)s に置

き換えられて行くプロセスはどの程度進行していたのだろうか？ Bambus（1947）の 19 の散文における分布調査によれば、16 世紀はフォーマルな文献では -(e)s の使用頻度はまだ低く、Ascham の *Toxophilus*（1545）で 6%、*The Schoolmaster*（1570）で 0.7%、Robynson の *More's Utopia*（1551）および Knox の *The First Blast of the Trumpet*（1558）で 0%、1590 年代には 10%台になり、やがて 1600 年代に入ると Daniel の *The Defence of Ryme*（1607）の 62%、*The Collection of the History of England*（1612-18）の 94%と急に増加する。これらの数値の中で、ドラマのジャンルだけは 16 世紀から頻度が高く、Greene の *Groats-Worth of Witte*（1592）と Nashe の *Pierce Penilesse*（1592）でともに 50%、17 世紀になると Dekker の *The Wonderful Yeare 1603*（1603）が 84%、*The Seuen Deadlie Sinns of London*（1606）が 78%となり、16 世紀にはドラマでの -(e)s 語尾の頻度が一足先を行っていたのに 17 世紀にはいると、他の散文が追いついた格好になる。しかしながら、Fuller の *A Historie of the Holy Warre*（1638）ではわずか 0.2%、Jonson の *The English Grammar*（1640）は 20%と作品による変動が激しい。

Bambus と同様ながらはるかに大規模な研究が Haraguchi（2002, 2003a, 2003b）でも行われている。彼は 16 世紀から 17 世紀にかけて、Bambus よりも多く９つのテキストタイプに分類される 89 のテキストにおいて、-(e)th と -(e)s の分布を調査し、Haraguchi（2003b: 150, 155）にまとめている。それによると、16 世紀においては聖書、伝記、エッセイ、書簡、医療科学、公文書のテキストタイプでは -(e)th を取る動詞はすべての動詞の 93%以上に上っているが、ドラマにおいては 15.8%にしかすぎないのに対し、-(e)s 語尾のみをとる動詞は 62.1%と大変高い。ドラマというテキストタイプは、16 世紀には 3 人称単数現在の語尾に関して、完全に他のテキストタイプとは異なった形態的なふるまいをしているのである。17 世紀になると、伝記、ドラマ、詩のテキストタイプにおいて -(e)s 語尾のみの動詞の割合が 90%を超え、次に日記と書簡[1]、小説、言語学、公文書で 48%から 67%になった。-(e)s への抵抗がもっとも大きいテキストタイプは聖書であり、その次がエッセイで 51%が -(e)th のみを取る動詞である。

3 人称単数現在の語尾の選択に関して、Lass（1999: 164）は 16 世紀初期に

1　Görlach（1991: 88）でも、-(e)th は日記と私的書簡ではまれであると述べている。

すでに -(e)th は格調高い（elevated）文体、-(e)s はインフォーマルな文体という区別があり、1580 年代までには -(e)s は口語の規範とされたと述べている。ドラマで使用される英語は口語性が反映されている可能性が高く、3 人称単数現在の語尾の選択に関して、他のテキストタイプに先んじて -(e)s 語尾への移行が進んでいたと考えられる。

２．２　Shakespeare の作品における３人称単数現在形語尾の分布

Shakespeare の作品では、have と do の 3 人称単数現在形語尾に注目して研究が行われて来た。大塚（1976: 80）は、一般動詞の 3 人称単数現在形語尾について *Julius Caesar*（1599）を調査し、-(e)s 語尾 154 回に対して -(e)th は 7 回しか用いられていないが、have と do については hath34 回に対して has は 5 回、doth30 回に対して does は 4 回であると報告している。一般動詞では、すでに 95.65％、have では 8.11％、do で 11.76％が -(e)s 語尾である。

Stein（1987）は、36 作品すべてについて Spevack（1968-80）のコンコーダンスを基にし、have と do の 3 人称単数現在形語尾について調査を行った。表 1 はその結果に作品の年号を追加し、それに従い順番を入れかえたものである。年号は Evans（1974: 47-56）に依る。

表 1　Shakespeare の劇に出現する doth/does, hath/has の分布

作品名	制作年代	doth	does	hath	has
1H6	1589-90	35		52	
2H6	1590-91	21	1	62	3
3H6	1590-91	32		60	1
R3	1592-93	36		65	1
EER	1592-94	16		34	
TIT	1593-94	30		59	2
SHR	1593-94	16	6	35	8
TGV	1594	14	1	53	2
JN	1594-96	41	1	64	
LLL	1594-97	43		37	

ROM	1595-96	48		64	
R2	1595	32	1	70	
MND	1595-96	31		38	
MV	1596-97	39		52	2
1H4	1596-97	30	3	52	2
WIV	1597	7	18	61	22
2H4	1598	58	3	64	7
ADO	1598-99	24	1	74	3
H5	1599	33	2	58	6
JC	1599	30	4	35	3
AYL	1599	25	1	52	3
TN	1599-1600	13	24	35	20
HAM	1600-01	27	27	65	10
TRO	1601-02	37	9	60	16
AWW	1602-03	6	24	52	28
MM	1604	24	9	71	7
OTH	1604	17	16	67	9
LR	1605	15	18	55	14
MAC	1605	6	24	52	19
ANT	1606-07	5	29	44	23
COR	1607-08	9	19	51	35
TIM	1607-08	9	24	29	33
PER	1607-08	19	11	38	16
CYM	1609-10	20	8	79	7
WT	1610-11	7	23	42	31
TMP	1611	13	15	26	7

表１を見ると、多少の増減はあるものの *Twelfth Night* のころから突然 has, does の頻度が増加し、その状態がコンスタントにたもたれるようになったことがわかる。また、Stein は *Twelfth Night* 以降の作品をさらに調査し、has

が生起しているのは散文に多いことも明らかにした。[2] 従来、-(e)th の語尾が音節を構成する場合、動詞の語幹が sibilant で終わっていることが指摘されて来たため、Stein は sibilant で終わる動詞が -(e)th と -(e)s のどちらを伴っているかというリストも作成している (413)。それによれば、*Henry 4 Pt1* のあたりで -(e)th と -(e)s 語尾の頻度が逆転して、-(e)s が多くなっている。すなわち、Shakespeare の作品の前半（1590 年代）には、韻律を理由として一般動詞の 3 人称単数現在形語尾に -(e)th が選ばれることがあったが、17 世紀に入ると韻律にかかわらず -(e)s 語尾が選択される傾向が強まったと言える。

一般動詞について -(e)th と -(e)s の分布はどのようであったのだろうか？ Crystal（2008: 189）は、全作品中 -(e)th が 304 例あり、そのうち 238 例は前半の 16 作品中に現れていると述べている。-(e)th は *The Merry Wives of Winsor* 以降では劇的に頻度を下げるのである。Crystal は各作品の出現数や具体的な動詞の例を示していないため作品ごとの分布はわからないが、304 例という数値は一般動詞の全使用頻度を考えれば、ごく一部であることは間違いなく、この当時の 3 人称単数現在形語尾はすでに -(e)s に移行していたと言える。[3]

２．３　16-17 世紀書簡集における３人称単数現在形語尾

Haraguchi（2003b）が調査したテキストタイプの中に書簡も含まれているが、書簡で 3 人称単数現在形語尾が必ずしも顕著に -(e)s 形へ移行していることが示されているわけではない。しかし、私的な書簡は口語の特徴が書き言葉としてあらわれているため（Nevalainen and Raumolin-Brunberg, 2003: 28-29, 43-44）、注目に値するテキストタイプといえよう。

ヘルシンキ大学において編纂された Corpus of Early English Correspondence（CEEC）[4] は、15 世紀から 17 世紀にかけて書かれた約 6000 通の書簡を電子化

2　Jespersen（1938: 189）は、ドラマの中の散文において -s の使用頻度が高いことを指摘している。

3　Görlach（1991: 88）は、16 世紀において口語と詩で -(e)s の方が好まれていたと述べている。

4　CEEC はヘルシンキ大学の Terttu Nevalainen、Helena Raumolin-Brunberg が中心

し、データベースにしたものである。この書簡集は、個々の書簡の執筆者の性別、年齢層、社会階級、職業、居住地域など 20 以上ものパラメーターが設定してあり、社会言語学的な調査ができるようになっている。Nevalainen & Raumolin-Brunberg（2003）は、この書簡集を利用してさまざまな語形や統語的な項目について調査を行い、その結果を詳細に報告した。3 人称単数現在形語尾の変移についても当然調査にふくまれている（Nevalainen & Raumolin-Brunberg 2003: 67-68）。調査は have と do を除いた一般動詞のみが対象となっており、その経年変化はグラフ 1 に表されている。

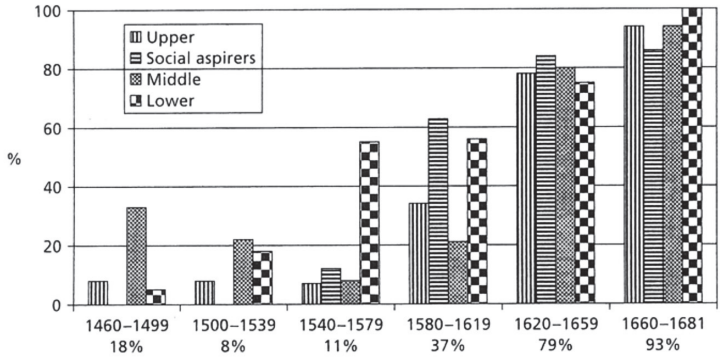
グラフ 1　3 人称単数現在語尾 -(e)s による -(e)th の置換（do, have は除く）

（Nevalainen & Raumolin-Brunberg 2003: 68, Figure 4.9）

-(e)s への置換は 15 世紀前半からみられるが、主要な変化は 1580 年代から 1660 年ごろに生じていることがわかる。いわゆる S カーブの典型的なパターンを示している。

となり 1993 年から 1998 年に構築した約 260 万語からなる 1410-1680 年に執筆された書簡のデータベース。書簡執筆者数 778 名、書簡数 5961 通もの書簡が収録されている。詳細は、http://www.helsinki.fi/varieng/CoRD/corpora/CEEC/index.html を参照。

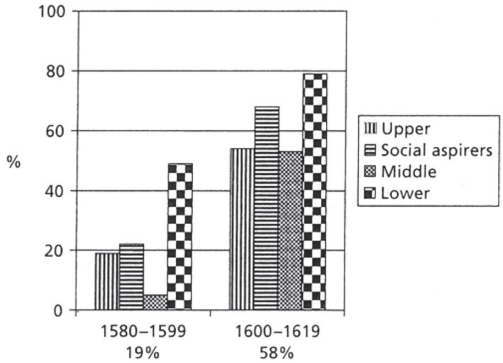
このような -(e)th/-(e)s の選択結果に差異をもたらしているのは、社会的な身分の違いという社会言語学的なパラメーターである。次のグラフは、グラフ 1 に書簡発信者の社会階級別情報を付与したものである。



グラフ 2　3 人称単数現在語尾 -(e)s vs. -(e)th（do, have は除く）

（Nevalainen & Raumolin-Brunberg 2003: 144, Figure 7.4）

さらに、ちょうど Shakespeare の執筆時期を内包する 1580 年 -1619 年の期間を前半と後半に分割したのがグラフ 3 である。さらに、1590 年代から 1610 年代にかけて、その急激な変化がよりよくわかるであろう。

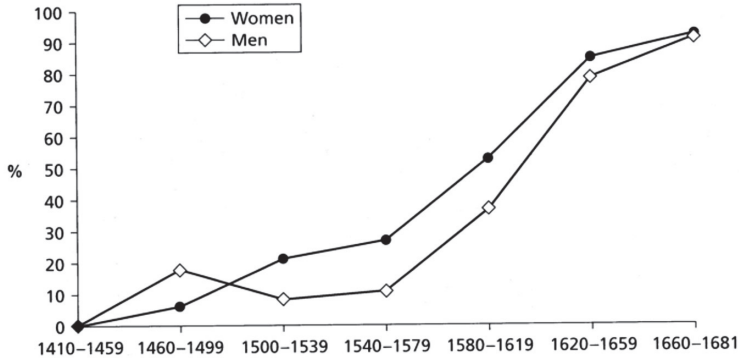


グラフ３　３人称単数現在語尾 -(e)s vs. -(e)th（do, have は除く）

（Nevalainen & Raumolin-Brunberg 2003: 145, Figure 7.5）

これによると、-(e)s 語尾の使用者は 16 世紀の始めから、とくに半ば以降圧倒的に身分の低いものたちであった。また、前半と後半において３人称単数現在形語尾を比較すると、前半は身分の低い階層での使用が群を抜いて多く、-(e)s へのターニングポイントは 1600 年ごろであることがわかる。16 世紀末は身分の低い階層が -(e)s を使い始め、やがて同じ書簡というテキストタイプにおいて上の階層にも拡張された。低い身分階級が支持し、社会の上層部に広がって行ったこのような変化を、Nevalainen らは「下からの変化（change from below）」と呼んでいる。

一方、別の社会言語学的なパラメーターとして、書簡発信者の性別がある。発信者を男女別にして、年代ごとに -(e)th と -(e)s の頻度を比較したのがグラフ４である。



グラフ 4　男女別 3 人称単数現在語尾 -(e)s vs. -(e)th（do, have は除く）

（Nevalainen & Raumolin-Brunberg 2003: 123, Figure 6.7）

これをみると、-(e)s 語尾は 15 世紀に男性の方が優位であったが、これは女性の書簡がなかったためデータが男性に偏っていたことに起因している。その後、-(e)s の頻度は常に女性がリードし、16 世紀末から 17 世紀前半の急速な発展期においても、17 世紀後半の完成期においても、女性が変革を牽引したことがわかる。Nevalainen（1996: 84）では、17 世紀後半で中流上層階級の女性が、has と does を男性に比して 10 倍以上の頻度でもちいたという論証があり、男性は伝統的な -(e)th を使い続け、女性が口語的な新しい形を規範としたことを明らかにした。

2. 4　Shakespeare の作品における 3 人称単数現在形語尾の社会言語学的研究の可能性

2.3 から、CEEC を活用した研究では 16 世紀末の書簡において、3 人称単数現在形語尾が -(e)th から -(e)s へ変化したのは女性が牽引したからだということが明らかになった。Shakespeare の作品でも、CEEC でみられたような社会階級やジェンダーによるパラメーターが 3 人称単数現在形語尾の選択になんらかの影響を与えている可能性はあるだろうか。

1600 年以降の作品では hath と has の両形が同時にあらわれているため、社会的条件が関わっているかどうか見ることができる。Stein（1987: 423）では、*Twelfth Night* の Sir Andrew Aguecheek や *Measure for Measure* の Mistress Overdone のような人物、兵士、処刑人や給仕等身分の低い登場人物が has を使用しているという。

また、Fuami（2001, 2004）は、*Twelfth Night*、*The Merry Wives of Winsor*、*Macbeth* において、嘲りの対象となる男性や下働きの女性に -(e)s 語尾が多いことや、Macbeth 夫人のせりふに見られるように、hath を女性が使うときは男性的な属性をあえて与えている可能性があることを示した。また、*The Winter's Tale* や *Measure for Measure* では、身分の高い話し相手に対して -(e)th 語尾を、農夫のような身分の低い相手には -(e)s 語尾を用いている場面があることを指摘し、-(e)th と -(e)s 語尾の使い分けには社会言語学や文体論的な要因がありうると論じた。

Shakespeare のどの作品においても同様に明快な影響があると断言することは難しいように思われるが、-(e)th と -(e)s の使い分けを登場人物の身分やジェンダーと関連して調査することにある程度意味があるであろう。

3　*Romeo and Juliet* における 3 人称単数現在形語尾の調査

3．1　-(e)th 語尾と登場人物

2.4 より、17 世紀以降の Shakespeare の作品でも登場人物の身分による使い分けがある程度認められた。Have や do よりも、-(e)s への移行が早く起きた一般動詞では、社会言語学的な要因がどの程度 -(e)th と -(e)s 語尾の選択に反映されているのか調べるために、*Romeo and Juliet* をサンプルとして調査を行う。登場人物が年齢層、性別、社会階級別に分布しており、社会言語学的な調査に適した作品と思われるからである。

Romeo and Juliet での -(e)th と -(e)s の分布を見てみると、has と does は一例も使われておらず、すべて hath と doth である。一般動詞 3 人称単数現在形はほとんどが -(e)s 語尾を用いており 320 例あった。-(e)th 語尾は 9 例のみで、すべての一般動詞の 3 人称単数現在形総数の中で、比率は僅か 2.8% しかない。以下にその 9 例を示す。引用のテキストおよび行番号は Evans (1974) に基づいている。

（1） BENVOLIO: That westward rooteth from this city side, RJ I.i.122
（2） MERCUTIO: Sometime she driveth o'er a soldier's neck, RJ I.iv.82
（3） MERCUTIO: He heareth not, he stirreth not, he moveth not, RJ II.i.15
（4） FRIAR LAWRENCE: What early tongue so sweet saluteth me? RJ II.iii.28
（5） JULIET: This doth not so, for she divideth us. RJ III.v.30
（6） ROMEO: Need and oppression starveth in thy eyes, RJ V.i.70
（7） FRIAR LAWRENCE: It burneth in the Capel's monument. RJ V.iii.127

明らかに 16 世紀末にはドラマにおいてはすでに有標となった -(e)th 語尾は、伝統的には韻律を実現するための選択肢として説明されて来た。確かにそのような場合もあるが、ここでは社会言語学的な要因を考慮してみたい。全部で 9 例しかないので厳密には言えないが、-(e)th を使用している登場人物には使用人のような低い社会階級に属するものはいないので、話者の身分との関係について論じることはできない。しかし、敢えて傾向について述べるならば、(5) のように女性が使用する例が 1 例のみであることから、-(e)th 形が残存する場合も女性よりは男性、特に Friar Lawrence のように年齢が高く職業的にも保守的な言葉遣いがふさわしい男性のせりふにあらわれているといえるだろう。

それぞれの登場人物はせりふの量が異なっているので、総発話量に応じて標準化すると比較しやすくなる。*Romeo and Juliet* の総語彙数は 23843 語で、その内女性の登場人物である Lady Capulet, Lady Montague, Juliet, Nurse の総語彙数合計が 7378 語、男性の登場人物の方は、Benvolio, Capulet, Romeo, Mercutio, Paris, Prince, Friar Lawrence など召使い等も含む総勢 36 名の総語彙数合計は 16455 語である。[5] 素数が小さいため標準化することにより誤差も大きくなることは念頭に置くべきだが、これを基にして男女別 1000 語にあたりの一般動詞の -(e)th 生起率を計算すると、女性登場人物の -(e)th は 0.000135 語、男性登場人物は 0.000486 語となり、男性のせりふには女性の

5　総語彙数は、Spevack 第 1 巻の 'A Concordance to the Characters of ROMEO AND JULIET'（pp. 406-71）に登場人物別の使用語彙数が掲載されているのでその数値を利用して算出した。総語彙数は、type 数ではなく token 数である。

約３倍多く -(e)th が出現すると言える。また、男性年長者である Friar Lawrence が２回の頻度で -(e)th を用いていることから、彼の総語彙数 2725 語に対して 1000 語あたりの標準化した出現数を出すと、0.000734 語と非常に高くなっている。しかし、Montague や Capulet など他の年長者のせりふにはみられなかったので[6]、Friar Lawrence 固有の特徴かもしれない。

３．２　-(e)th から -(e)s への修正

Romeo and Juliet は 1995 年に制作され、1997 年に初めて印刷された本は First Quarto (Q1) と呼ばれている。Q1 を 1599 年に改訂したのが、Second Quarto (Q2) である。Q1 は最も初期の印刷本でありながら、テキストの質がよくないことから海賊版や役者が記憶をもとに書いた版と言われ、あまり顧みられることが無かった。実際、内容も Q2 や F1 と比べて欠損がおおく、同じ場面のせりふも簡単にすませているところが多く見られる。しかしながら、近年では Erne（2007）も述べているように Q1 は当時の上演をもっとも良く反映していると見直されている。Q1 は文学的な価値は低くとも、初演の舞台で使われた英語に近く、言語研究の対象としては興味深い。

そこで、Evans（1974）にみられるすべての３人称単数現在形を Q1 の語形に照らし合わせて、語尾の異同調査を行った。Evans（1974）に見られた -(e)s 語尾は 311 例あった。この数値から ト書きの部分で使われた例は除外している。この 311 例の内、対応する Q1 の行にも同じ動詞が使われていたのは 173 例のみであった。Q2 以降加筆したせりふが多々あり、対応個所が少なくなっているためである。

Q1 との照合の結果、以下のように７例において Q1 で -(e)th 語尾であったところを Q2 や F1 では -(e)s 語尾に変えていることがわかった。[7] 前後の表現

6　Capulet が使用した総語彙数は 2121 語で、Friar Lawrence の 2725 語とさほど変わらないが、Montague は 317 語と少ない。

7　Erne (2007) は、(10) Q1 lodgeth が Q2 lodges に、(11) Q1 stretcheth が Q2 stretches に修正されたことについて注で言及しているが、(8) Q1 discourceth が Q2 discourses に、(9) Q1 changeth が Q2 changes に、(12) Q1 presseth が Q2 presses に、(13) Q1 saith が Q2 sayes に、(14) Q1 commeth が Q2 comes に修正されたことには言及がない。

も異なるところがあるため行全体を引用する。

（8） ROMEO: Her eye discourses. I will answer it. RJ II.ii.13
Q1 Her eye discourseth. I will answere it.
Q2 Her eye discourses, I will answere it :

（9） JULIET: That monthly changes in her circled orb, RJ II.ii.110
Q1 That monthlie changeth in her circled orbe,
Q2 That monethly *changes* in her circle orbe,

（10） FRIAE LAWRENCE: And where care lodges, sleep will never lie; RJ II.iii.36
Q1 And where care lodgeth, sleep can neuer lie.
Q2 And where care lodges, sleep will neuer lye:

（11） MERCUTIO: O, here's a wit of cheverel, that stretches from RJ II.iv.83
Q1 Oh heere is a witte of Cheuerell that stretcheth from,
Q2 Oh heres a wit of Cheuerell, that stretches from,

（12） JULIET: But O, it presses to my memory RJ III.ii.110
Q1 But ah, it presseth to my memorie,
Q2 But oh it presses to my memorie,

（13） NURSE: O, she says nothing, sir, but weeps and weeps, RJ III.iii.99
Q1 O she saith nothing sir, but weeps and pules
Q2 Oh she sayes nothing sir, but weeps, weeps

（14） NURSE: See where she comes from shrift with merry look. RJ IV.ii.15
Q1 MOTHER: See here she commeth from Confession,
Q2 NURSE: See where she comes from shrift with merie looke,

参考のためにト書きの異同の例もあげておく。（15）Q1 embraceth は Evans（1974）では該当箇所がないが、（16）と（17）の Q1 goeth はそのまま Evans（1974）でも保持されている。[8]

（15）Enter Juliet.　RJ II.vi.16
　Q1 Enter Juliet somewhat fast. She embraceth Romeo
　Q2 該当なし

（16）He goeth down.　RJ III.v.43
　Q1 He goeth down.
　Q2 該当なし

（17）She goeth down from the window.　RJ III.v.67
　Q1 She goeth down from the window.
　Q2 該当なし

上記の７例中、（8）から（12）の５例で、-(e)s に修正された動詞の語幹が sibilant で終わっている。Nevalainen（2006: 90）は、sibilant で終わる動詞は 17 世紀に入っても通常の動詞より遅くまで -(e)th 語尾を保持したと述べているが、*Romeo and Juliet* では sibilant を語末に含む動詞の残存していた語尾が丁寧に -(e)s へと変更された。

社会言語学的なパラメーターについて検討してみたい。まず、(8) から (14) の７例中、(9)（12）（13）（14）の４例が女性のせりふであるに注目すべきである。-(e)th 語尾の残存が男性のせりふに多かったことと重ね合わせてみると、ジェンダーの差異が顕著に対照的であり、単なる偶然ではないように思われる。（14）のせりふは、Q1 では、Capulet の ‘But where is this headstrong (=Juliet)?’ という質問の答えは Juliet の母親の Lady Capulet のせりふであったが、Q2 以降 Nurse になった。そうすると、ますます身分の低い Nurse にふさわしい語尾として、commeth から comes への修正が必要と

8　（16）（17）のト書きは、Evans（1974）では両方とも含まれており、動詞の語形も goeth である。Textual Notes において Q1 が goeth であると言及されている。

なったと思われる。

３．３　-(e)s から -(e)th への修正

今まで論じた例とは反対に、Q1 で -(e)s 語尾を取っていたのに、Q2 では -(e)th に修正しているケースもみられる。前述の（1）から（7）の例を再度提示し、比較のため Q1、Q2 の読みを付加する。

（18）BENVOLIO: That westward rooteth from this city side,　RJ I.i.122
Q1 That Westward rooteth from this citties side,
Q2 That Westward rooteth from this citie side:

（19）MERCUTIO: Sometime she driveth o’er a soldier's neck,　RJ I.iv.82
Q1 Sometime she gallops ore a souldiers nose
Q2 Sometime she driueth ore a souldiers neck,

（20）MERCUTIO: He heareth not, he stirreth not, he moveth not,　RJ II.i.15
Q1 He beares me not.（一語のみ）
Q2 He heareth not, he stirreth not, he moueth not,

（21）FRIAR LAWRENCE: What early tongue so sweet saluteth me?　RJ II.iii.32
Q1 what earlie tongue so soone saluteth me?
Q2 What early tongue so sweete saluteth me?

（22）JULIET: This doth not so, for she divideth us.　RJ III.v.30
Q1, Q2 This doth not so: for she diuideth vs.

（23）ROMEO: Need and oppression starveth in thy eyes,　RJ V.i.70
Q1 該当箇所なし
Q2 Need and oppression starueth in thy eyes,

（24）FRIAR LAWRENCE: It burneth in the Capel’s monument.　RJ V.iii.127

Q1 Me thinkes it burnes in Capels monument.
Q2 It burneth in the Capels monument.

(19) は Q1 では動詞は gallop であったが、韻律を整え driveth に変更となった。動詞を変更した理由として考えられるのは、先行する 77 行 'Sometime she gallops o'er a courtier's nose' にすでに gallop が使われているため、語彙にバリエーションをもたせたためであろう。(20) の heareth, stirreth, moveth の 3 語は Q1 では beares のみであった。Taylor（1976）は、この行の -(e)th 語尾について、'a tone of mockery' を作り出すのに役立ち、'a blending of meter, comic effect, and strict parallelism' という効果を出していると評価し、Crystal (2008: 191) は、印象づけのため formulaic (or mock-formulaic) language を使ったとしている。(24) も（19）と同様に Q1 の -(e)s 語尾が Q2、F1 で -(e)th に変更された。ただし、詩行の他の語句にも修正が行われ、韻律の調整が行われたが、Friar のような年長者と聖職者という立場にふさわしく、格調高い保守的な -(e)th に敢えて変更したとも考えられる。

４　まとめ

Shakespeare の作品にみられる動詞の 3 人称単数現在形の語尾は、制作年代の時系列に伴い -(e)th 形が減少し -(e)s 形へと移行し、そのプロセスの研究は have と do を中心に行われて来た。他方、一般動詞における 3 人称単数現在形は、16 世紀末には -(e)s 形が一般的となり、-(e)th はごく少数の例が残存していたため、韻律を実現するための選択肢として使用された有標な例として説明されたり、せりふの語彙が格調高いスタイルを要求する詩的な文体故と説明されたりした。Crystal（2008: 191）のように、この時代においては -(e)th 形と -(e)s 形は自由変異（free variation）であると結論づけることもよくある。

本論では、初期近代英語期の書簡集において、書簡の発信者の社会階級や性別が -(e)th 形と -(e)s 形の選択にとって重要なファクターとなっていたことを鑑みて、*Romeo and Juliet* の作品中にみられる一般動詞の -(e)th 形と -(e)s 形の例を抽出し、分析を行った。その結果、-(e)th 形９例中女性話者は Juliet １名のみで、他はすべて男性であること、男性の中には年長者の Friar Lawrence の使用例が２例含まれていることから、-(e)th 形の保守性を表して

いる可能性があるとわかった。また、Q1 の -(e)th 語尾を Q2 以降で -(e)s 語尾に修正したせりふは 7 例あった。そのうち 4 例が -(e)s 語尾を率先して採用してきた女性のものであり、身分の低い Nurse のせりふから 2 例が含まれていることは、-(e)s 語尾の口語性、日常性を示しているといえる。これは、残存する -(e)th の使用者がほとんど男性であることを補完する関係である。このことから、3 人称単数現在の語尾の選択には社会的言語学的なパラメーターが影響をあたえていたと考えられる。しかしながら、Q1 から Q2 への修正は、単純に史的変化や登場人物にあたえられた属性のもつ社会言語学的な要因により生じたというわけにはいかない。本文の字句や修正は、作者、編集者、植字工、印刷工など多様な人々の手をへて行われた結果であり、発信者の限定が可能な書簡とは大いにことなった事情を抱えている。さらに、*Romeo and Juliet* での異同例だけでは不十分であり、この結果はパイロット的な研究の成果と捉え、もっと初期の他の作品についても検証を行う必要があるだろう。広く初期近代英語期の 3 人称単数現在形の発達をしるには、Shakespeare の作品に限定せずに、16 世紀のエリザベス朝演劇についても調査をする必要がある。

参考文献

第 1 次資料

Daniel, P. A. (1874) ed. *Romeo and Juliet, Parallel Texts of the First Two Quartos, (Q1) 1597 – Q2*, 1599. Pub. for the New Shakspere Society, by N. Trübner, HATHI TRUST Digital Library, http://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=mdp.39015031218335;view=1up;seq=1;size=150

Erne, Lukas (2007) ed. *The First Quarto of Romeo and Juliet*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, Cambridge.

Evans, Blakemore (1974) ed. *The Riverside Shakespeare*, Houghton Mifflin, Boston.

Porter, Charlotte and H.A. Clarke (1906) ed. *The Complete Works of William Shakespeare: Reprinted from the First Folio, Vol. 10*, with an introd. by John Churton Collins, T. Fisher Unwin, London. HATHI TRUST Digital Library, http://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=mdp.39015082514855;view=1up;seq=8

第２次資料

荒木一雄・宇賀治正朋（1984）『英語学大系第 10 巻　英語史 IIIA』大修館書店、東京

Bambus, Rudolph C. (1947) "Verb Forms in *–s* and *–th* in Early Modern English Prose," *Journal of English and Germanic Philology*, 46, 183-87.

Crystal, David and Ben Crystal. *Shakespeare's Works*. http://www. shakespeareswords.com/Romeo-and-Juliet

Crystal, David (2008) *'Think on My Words'*, Cambridge University Press, Cambridge.

浮網茂信（2001）「シェークスピアの３人称単数動詞語尾 -th/-s 再考—初期近代英語の社会言語学的イメージを求めて—」、菅野正彦教授退官記念論文集刊行委員会編『菅野正彦教授退官記念　独創と冒険—英語英文学論集』英宝社、東京、273-84.

Fuami, Shigenobu (2004) "*Doth/does* and *hath/has* in Shakespeare: a Socio-Stylistic Approach,"『大谷女子大学英語英文学研究』31, 81-95.

Görlach, Manfred (1991) *Introduction to Early Modern English*, Cambridge University Press, Cambridge.

Haraguchi, Yukio (2002) "Verb Froms in *-(e)th* & *-(e)* in Sixteenth-Century English,"『熊本学園大学論集「総合科学」』8, 2, 15(141)-47(173).

Haraguchi, Yukio (2003a) "The Third Person Singular Verbal Endings *-(e)th* & *-(e)s* in Seventeenth-Century English,"『熊本学園大学論集「総合科学」』9, 2 , 25(123)-49(147).

Haraguchi, Yukio (2003b) "*-(e)th* & *-(e)s* as the Third Person Singular Verbal Endings in the Early Modern English Period,"『熊本学園大学論集「総合科学」』10, 1, 139-165.

Jespersen, Otto (1942) *A Modern English Grammar*, IV, Allen & Uniwn, London.

Jespersen, Otto (1972 [1938]) *Growth and Structure of the English Language*, 9th ed. Basil Blackwell, Oxford.

Lass, Roger (1999) "Phonology and Morphology," in Roger Lass ed., *The Cambridge History of the English Language*, Vol. III, *1467-1776*,

Cambridge University Press, Cambridge, 56-186.

Nevalainen, Terttu and Helena Raumolin-Brunberg (2003) *Historical Sociolinguistics: Language Change in Tudor and Stuart England*, Longman, London and New York.

Nevalainen, Terttu (2006) *An Introduction to Early Modern English*, Oxford University Press, Oxford.

大塚高信（1976）『シェークスピアの文法』 研究社出版、東京 .

Stein, Dieter (1987) "At the Crossroads of Philology, Linguistics and Semiotics: Notes on the Replacement of *th* by *s* in the Third Person Singular in English," *English Studies*, 5, 406-431.

Spevack, Marvin (1968-80) ed. *A Complete and Systematic Concordance to the Works of Shakespeare*, 9 Vols., Georg Olms, Hildesheim.

Taylor, Estelle W. (1986 [1976]) "Shakespeare's Use of *Eth* and *Es* Endings of Verbs in the First Folio," in Vivian Salmon and Edwina Burness eds. *A Reader in the Language of Shakespearean Drama*, John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia, 349-69. [Rept. *CLA Journal*, 19, 4, 437-57.]